三日月太郎
巻
光文堂
へ13
1291
2

へ13
1291
2

帝國圖書館藏

序

宣亭

春の日とあらしとてうらうらとさく花おさそひまとひあつまりて春の結構花御の歌とて續けるなり

世中にさくとも見えぬ人を見まほしの陰に入れ

櫻ひもとぎあり可愛形の表にあらはれ

ものとそやして情おもしろ仕

よすがさへしるべきまでぞ女おもたゆすらも
ぞ思ひ給へんもとハいとも賢くゐるべあり
外ゐかさるこバ高ようなる桂實あきのゐ級
たる川竹の流れまとれ里ゐも高尾小と
戯ゐんどを初とうてうきこ盤きゐ中
ゐ様をあつ屋ひせ遊女もゐうびされ
どもきこハとる伊賀の君ゐてうまうの
揚屋ゐ深沢寛ゐ行の調ハ

さうゐり詞ハ葉の林ゐとけ入と聞ゐの
うゐ誰ゐもさうそゐうゐんゐまさるゐび
ゐ競ゐうハ陽ゐのゐうゐ我ゐ如くゐる
局とう唱ゐる忘ハゐ丹ゐあせんと呼ゐ
戯女のゐりゐるゐ恥と字ゐてのゐゐゐ
時めきゐとハ俳優ゐうゐうゐ繪ゐ
ゐる草ゐゐも紙ゐりゐ世で石投ゐ蓮
日ゐをゐうゐさる童の耳ゐもうまゐとハ

解らんとて友うきなる楚満人
ぬ〜ものを名を例はつくり物語
あとりて世は時雨ぬ降さん
やまそれぶたつの一言加へと
はるく侍ふみ〜うき筆はとりたべ
きども難波江のけりも古〜無象
なる徒だあ〜我ふ〜のを疎うなハ
人ぐみもふ〜たまさん夏を待ぎ

なまなかふたの世を
ふたまりのきこのとの酌とのふ
葉月はたそぐ免
文亭門人佳境更
實亭綾輕徒

おせん
道具屋重兵
三浦屋八助

春宵美談三日月 阿専巻之四 雅名 本朝好逑傳

江戸 南仙笑楚満人稿本

第六回

重蔵ハ身の過ちに今更何とかゞりてのゝべき詞もなく
あらさゝ不金を失ひ一五一十を物語つる時しき
勤れ身よ似げる見三日月お仙が表裏のゝ表信ある
姑終ゝを落もうく。涙ぐらゝ演るにぞ子孫
在たゞめとして。女房お亀も傳よ姑終を嘆て居こり

「モシエもまへ何とおぼしめしまん。
ゑんよ今の重藏ぶ新を使ぶ客代とのひそかの実
る娘よ切店の女郎ゑんだをさまてあてとのかの可愛そて
る夏じやアどざりませんか。私ら見こ夏もるい女でござ
アとまそが。そのかの仙とあらぶどふのかの夏ら不便でく。
ぶらふは涙がこぶ出ます子。且那どのろあそうはどざりま
すまのろ紙へ「ハテサ仕指とのうてどふも外ふはねへ。
高で切店の女郎どろら。百両の二百両のとのふ身の代
でもあるめへろら。年季をぬいく娘ら芸ぬて出るこり外ハ
あくこぶれへぶ。あくこそう流行女ろら。親方も金借ど
からろへく大概る夏じやアたるすめへ。そて親えへも
ゑこられへけるあアろらられへ重藏シテ親とのかの何ふの
だろ娘ころ重「ハイのあたるハ美ろとませぬぶ何でもお
親ろの娘ひとゑへまそが。何ら深のようすがあて。おこと
高貴を出ておとまそると見へまする。只今おそるし
ゆ上まそことより。ぢもじ人さるの物ぶら。うまそさのあまり

十両ばかりうとゝやまゝこら。大きゝよ彼を養まゝてゐるうく
受取るけゝきハござりませぬ。かくうく私も困ゝ
存じまゝて。手紙かくりまゝこと。お内儀さまの心痛よ
ゝまゝするでハござりませねど。あまりとゝやせば彼のお仙が
志がかゝでけのふござりまゝす。私が給金のあるゝこゝお預
ゝておきまゝ金子も。かゝこれ四五十両ハござりま
ゝう。あの金をどごのようきまゝ。ぶで相ゐりませう
と妻ゝら彼の女の菩提をたゝみてうゝハふござりまゝた。

どゝかゆうゐる妻とゝやまゝ。私がこの女を執心のゝこと
ゝゝで。且那さゐの思ひも入つまゝすゞうく左招
ゐる妻でハござりませぬ。はのぎをひとくみく。お涙とごけ
ゐきまゝて下さゝりませと。おちうく逃げゐた。元来情深き
よゝ人支郎よ。イヤモウおまゝも仕事まで。ゝとのゝめも
ゐく。便りござうく思ゐゝ。折ゐらのおゝ。ゝ詞ゐ遠ゐうハ
五十や六十の金ハございでも。あゝて出ゐうゝ娘を受ゝて
別仕よゝて。ありさうくでゝ。猫よゐうゝら娘ゐゝて。堪ゝまう。

夫婦が差先の樂しみの為に思ふが。亀てあの
了簡ハどうぞ一そ其ハ私が方から頼つてもらへ
いてもらひたいこの所でごぎります。何ようとてハ
りて嚊を遣ろう後がとがまて後が一ッたのよろく
早くその女中が見とがどぎります　一馬鹿なことを
いろこ物ごそのようなこちらぐとんもうすると思ふと。返
て足元を見て。めりけへる夏をいろめごくら重箱。
とんる夏ア人お先者ぐが。無間の吉五郎ぐいひ。性

アノ男ハ佐久女が橋の方へ久しく住て。ごろつきて居と
から。あちらの方ハやア此安の人も沢山あでごろう。そん
でも蛇の原ぐやアへびとやらで。その道くらたをを
ナまこバ。年割とやらで連てこらまる夏もいらもある。
おまやおまが往つて参合ちやア。如何て面倒ごろら。今
からおまが吉が所へ往てあまをとあんで相合よあろう。
家へうんでたうしを去てもいところが内外の者よとん
な夏ぐ必くとやアるらの。アノ男ハ亀角髪が大のうら。

どふも隠〜夏ハうらねく「そんでごぎります」とも。
そんうらあまくさイ四郎苦労うぐら吉が呼へおもるすろて
頼イで直ち今夜つまてきるようきうと下さるませ。
私ハちうとも早く逢こふごぎります「どふしてそふ
急イ往くめのう」「夏も二夏も掛合て親えも説ん
ちこと上でうまバまを引て連て来る夏ぐうるめう。
そふ見へても又どふふ足ぐあるめく物でもねへ。そんう
夏ふやア抜目の往く吉ごから。根こんざのあらあふ
あらうこと上でうまバ。軒季をのこある夏すうらねへ。
ア何ふうあまぐのりて吉を夏うて。うく正きせうる。
重義てあくもあまと一呼ふ吉五郎が呼までの間て
くうあまと重ハイくうとうまうまうこあうこ方四郎嬢
うこのふ思たうまバ私も有つ難ふごぎります。何ど
呼までるお供いこ〜まあのでく左拵うら且那さあお
供をいこ〜まう手そそんうら往くくまろ。コレお亀衣
類をおてくま「ハイく何のめ〜めを申ます

子「何でもいく結城鴻がいひ。そしてあつちの草羽織
を生ややま」ふる「ハイくトいちくばかりて雑ろくき子るこ内お重ねも
おとろうる裏屋ずと吉五郎とよぐる。弱のうえふとうるまぶ。祈しも吉
五郎ハ女婦うけひるのあれうれ海ーあるこのくこ人して雪のしばぐらの
かれてうろ出入ごの旦那ごの貧やふうく。酒ふうーー居さりしば
より貧乏どうとうてもあれるれどちをうのやりチてうーうくぶちうくて
たふこうー　吉五郎「モしとうや　旦那　よくおうきりやーこ重
ぐうきんか四供で何ろ四月うどぐりの子ふうら。ぬびよ生一
さまびとうーうどぐうと子ふよ。ぐくとんふきうあ
家へおうきりて。面目次第もどぐりません。へて

ふうり子ーこ。何でどぐり子ふ子。今テッからどとへろ四絲向
でどぐり子ふれ。お供をいうちまちう。旦那のお供やう
又呑子て大方たれハ仮宅でどぐりやきふ。ふうちも
こんぢう間　友達の幕乳ふら。婦多川の仮宅へまぐ子て
五人連で四日ぶん流ーー子て。内の山の神の前と大
きくぢうーき。ふうこ今日酒をふうの仲直りきのふの奴
だぶきくこぐどぐり子せん。今日の四絲向ハどこどぐり
子ふ子　子「コレく吉五郎。今日ハ変ーてそそる夏じやう

行く　吉「へエて芝居う子。モシ戯場もさもの時分ハ見るく
ハござりやせん　吉「何サ芝居でもれくのさ。ちらつと見物よ
うの〳〵頼みこの夏が有て来たのゞ　吉「へエてうとうを
ゆくと且那うちも憚うとうぶら吉五郎でござりやす。
何やもあつゝやり出するめくさんが車屋さんを連る
すうてサ。うちが呼へあるうさりゆて聞くで頼てく
夏があるとあつゝやまゞ百も差知二百も合点よう
ござりやすゝまゞ女子の一件でござりやせう。あ前さん
ハ全体つまみ喰がお好ゞ。何呼のゝ誓吉呼ら何らの
娘をちらつひり一トロこの〳〵と呼が女の優よ目が出来ると
何とうのので。お袋が六ツう〳〵くいつて。やするのゝころうこ
つあつてうきり拵へ夏ゞ。そんなのけつふてく夏をぬーやア
がつあつうちが合点あやせぬ憚うとうぶら垂間の吉五
郎さんが隙てあるさらア。のでこのけてルやアが毛。
あまゞ往て只えんゞこのけて来る法もあつてのらア。今
から直よめくりやあうゞこのあまゞ子　吉「コレサ大変を

きろーやんる。喧嘩でもあると思うて長屋うちらら人が来てハるいどのも貴さるハさるだるそこの
夏でハれく　吉「へエて又遠ひ中くろ子。エてもろりさく
男ぢり女郎ざろう。そらやアサ何が大殘ぶ巾兎の
場所でもサ。このちがのうく内證へするらやアどのろ
このころ。噺しのつれ夏ハござりやせん。保おくさん
がこの人ぶやアるくすると女郎よ法よりみられる
夏ござります。是非女郎とりふもうハ。何不臨まさ

男ぢでも。そこぶ商賣ざろら。喧をつきやアがるもんど
からっ年季の長いもつをみじりかくきさり又短つろの
のを長くいつこりいろくるな夏をあやアがるそして兄
きぶ何でとりふもうがるくするとエ喜ぶもんぶそん
な夏でもあやアがるをあるぶ合紙しねく。アア旦那どの
たろうけでござります。吉「コレサどのぶ兎角ぶきるハ
大きな変をするでとまりたてる。笑てそんこと
おやアれく。吉「へエて又遠うこ子。そんるら噺ざろう。

全体あのくさんが氣が早いから手「とんぢ夏をのこと
物ごとをしておまぶたんる夏をまるものら今日あれが
来こと訳とのふこそぢそ。外でも絵ぐ四五日遅よ。この
重箱よ位く女が橋のお屋敷へ三百両とのく
掛取ちとよ有ことを屋でうーるて来このご左を金
返つこぶ。そまよ付てとるこよ頼む夏があて来この
ご重箱おまよ代つて委細の新をよくとうんりと吉
へまるーて世せさろーやのトの道話で重箱ハ又ものや三日月お稲
ぶ五十もとすーく吉五郎へちー

けっかどよ吉五郎も名ぶ男ぶら　吉「モシそうやう可愛そふる
そぶろに表まーをのーつく
夏でござりせす。その女の年季を秘いて聞てもらのく
ありるきり中。婚せまるりやす。下どのひとの新屋よ
明店がござりやす。店賃が二分と二匁五トで樽代が
一分でとんごのひうちでござりせす。あすとと極あく
おまるくるきりやー。ありちくハとちがのって。やっきりを
つけく上やおろう　子「どふーてそんる浮氣ふ夏でハ
絵く。孫よとうこら娘よおこふと思てそまで受ル

そふといふのぢ　吉「エておーのれんぢ後へ。何てふくろ往
爺人会てりんや去ろう。下どあのもちよこ　兄ろこ
ざりゆすうら直ち今ッからめいりやまろう　子「それハ
ひ若労ざ。そんろらすくれへが是を小歩まして往く
来て下せへ。まこと相談が拵てこら。きろと私を去ろうト
一角そうめが吉五郎ハ大きふ嬉び　吉「ハ二サ　且那ろんる夏をろすつちやアる
ろふどぎりゆす。不新ろらひ基ようろくおこるやる　私の
夏でどぎりゆすふ。おろうるさまびのくとふのくものく

お返〜ハ不難ざいこぶてあきやせう。是ぢやア又
大きふめくるにいせひがいひ。左指ろらあるこハもら郎
ようお返りつこれすすろ。コレ嫁ろろようく此私をやる。
ハイ左指ろこ。重きん此若労トつのやろうこらぐく吉
五郎。ふこへをかへ〜羽折引ろけ。佐く女が橋へと出て行

第七回

斯く吉五郎ハ急ぎ佐く女が橋へのこり美兄ろる者
を頼み。お仙が親方大和屋文蔵が方へのこ。かくとこ

入るゝぞ。文藏も委細の訳を聞て。子を人夫婦が志の
程を感じ。お仙を導びて金子の変を尋れしよ。お
仙も今ハ隠すゝようなく。あらの侭よ物がたりしゝバ。
文藏もお仙が繋白を聞て漫よあ是を催しつ
吉五郎よ打向ひ　文　私もそ子めてうけて家まゝ金
子の訳。そ是を又子を人さゑとゝからんがお願ひ奉れて。お
仙が身受をして出ちらの品深物の思召有
泰るのとも。お礼ハ詞よ尽き是ます世ぬ。ノ　お仙

すゝハ全く金でかくまゝ奉公人とゝやでもどぎりま
せぬ。元ハとゝまゝを私が店判をうゝて募ゝ募
暮の女ゞ元の品を人さゑよどぎりまゝが繼母
の絶言よ在ゝもあらを。内をうけ出さうゝそうく
其寡の所へどぎろて。かうとゝ成て居さうゝ
まゝこうちその女も永の暇ひ店変の方を絶方
ゝよ。ノ　お仙ゞるあとうちへ引取て養育しておき
まゝ。そゝゝ内ようの其女もうゝ引つゞ

私が永くの病氣も仙すれて店へ出て客を取る。
見るから見る似よりどころもなくて店へ出て下さる
まゝとりつくる糸馬鹿る夏をいのちぐ磨へあるが
喰ふ夏が出来れくて餓死バかりそそんる夏をさせら
るものゝ。嗚呼飽魚の肆より入るものハ其臭きを
嫌ふるとあらとんる所よりどぎまが。そのの拵る夏を
ゝやる。ゝてゝびまもあるゝるさまるゝ何
で賤ゝの家業をいゝまする私でも。そのよるる

夏をあるゝるさせまてハ涙ませぬとも何ゝまま
ゝて続まゝ。そのうち隣る私が病ひ治を
加ゝゝうちよ隣の店へ出て。おるまるる。お揚とのゝ
女と相談ゝて。ちゝろり店へ出まゝ客をがとり拵が。
客人毎ゝ訳をゝまて。肌をがけゝまあるそう
にぎりまが。磨へ肌をけがさあるとのゝて。拵やゝとの
夏が仙が実の親ゝさるの方へ嫁へそゝらうゝまま。
後日ゝ私が何とゝ訳がぎりまあう。ゝまるる

物ごとに氣づかひあるまでも貪欲人のうる
さきに今日はてまりまきあるを義理ようけるを知らま
がら。お仙を店へ出してあるこまきる。そふいふ子細のお仙
でござりますまバ子をくさるとの町人ゑごら隨分
人にも表らまを別代のおくるとお仙を娘よ貰ふをあつ
あやるに。頼よてもるのお仙が外い幸のあるをお蔭で
五年ばるるの金もとりまさしゑるら。男受のるんのを
十金にいりませぬ。只さへ上すまやうわどしよ。子をへの

さる乃至婦へよろしくお世話をおこのみまきすとの
実を明す　祠のもし。公も直ぐの本を切てるべき如
き男力の主公が言ふ吉五郎もわどく感ず「モシ
ろもも常らお世話まきする道具やの旦那のおこのみ。
當時がつかう流行。お仙さんの夏るをバよろぴど六の
かくらうが。おまぶを際まを行けばよのぶと思ふと所
業ばるるり産ぶ安いと女ら。おくさんがそう造作
をくぶ金でおるんをさるやア。ひろもも遠くの所を

糸うこきがあると申すと。中手すものでござりや
すつ併ろうがそのひろすもおやくさんの方でも。
外よりもねく所をあの子を引上らまちやう惜うろる
や分ごけまで。翌日が日ならおとまんるさりやあら。
子さんも隨分五十や三十の夏よとまんるされ
別上でもるー。そまにおあるよ金をとりてあげるさり
や　ヤイエくどふーくくうくくあつて金所でハぎ
つまりあ。そのよるの所べ養子よ申る夏とろちら

支度をさせてもあちこの所又私ひとりよ成ます。
喰ふばらいよ夏ら。どのてもものてまちこのようふる
夏をお案じるきまずあ。お連まるさりまー出ハ
りのおお仙てあくのばやう何と路の町人でも人よ
あらまこと道具や子さくさるる。おれーが実ぎるを
感ぶさろーやりて。どふでハ苦思をのーてありこと。
今安くとりの山深切。あまず又おれーをこのの
奈落へのうまでも落ーておくるが不便さ。丁どのひ相談

と思ふの由系慾をすてゝ女ーを子さへさるの方へ養
女よあげよと岩つぶ弥おねーい子さへさるの方へ
行公ろトとと且てお仙ハ二人よりひ　あんこ且迄私を
娘のよふよ可愛がつて下さろと且那さるの子さへさると
やらのお志ハ嫉ーけまで安ちたり私ハいろまでもある
たのお傍よ居て出勤がよろーうございます。濡れ
さるとて露をまいと。モウこよるまーさ上からハ
どうこへもまのうこくハどぎりませぬ。とそす代上ハ生世

の世まーこへまーこまで行志ハ尼よるりまるる私の
頼ひ。どふぞこまとをあるーーつきまで下さりませト。
涙ぐうぐらよ頼ふあで文藤ハ改をふり文イやくそれハ
ふる極たのようふるまどこるのふ簡まぐ蓉の花のあま
何方へるりと縁組をさせて。武士でるくとも。そま指
鷹よくらすぐ上分別そのよう上で不仕合でもつぎまよ
ころまこくころ子を先ぐそこさろのふよるる不ふる夏と
ぐあつこるら其時ハ尼よるるまも勝手よするがよのぐ

まづ何はさてそのよりよりよく急ぐ夏八つの。随分武家方も二腰をゆめて町人ようり又仕舞ず人もいとらもあるとのものご。頼つてもねく今度の幸のいとけて子ゑへさ夏の方へ行ぶよひ。必ずまぶつるの夏八のとぬぶよ。そうさきく兼知ナエバ直ず相談のとくのよ夏。ア王吉さん。そふでハごぎりもせぬ。吉左指サこる夏をややすをどふ。仲人口のようでごぎりもすぶ。子ゑへのさんとのふ人も。あるの時ハひどく胴樂でいろく甚

労しくとおくそどぎりやくぶ。今ハ堅くるのて孝実で商賣を精出ちこいふのんごぎら。屋敷方のうけハよくしまずく工面ハようる。只金の延るだろりぶ樂しく。そエでようて内外の者ハも思ひやりぶみて。唯一人且那をるくのふ人ハどぎりやせん。鬼の女房ハや鬼神とやらで。お内義さんも鬼ハ通ず者でろちぶもが往て。もやし酒を呑めの飯を喰へのと。そエハく世夏のひとだちやう。でんよあんる内家とのふぶどとやもどぎりや

せんこう容儀がよけりゃ。ちゃんとまでもあんるふいひものうを近所の評判でどきり。チチ。ちの位の内ごめを。ひ子がいきなすることで。中く居ゆのうえぜとのふ夏ハどぎりやせん。お仙さん何よーえ。ち。徑つものに極うせくとてが今からうくうさく又ようくあめくさんの心志のひどす。且那へお新ヤやせう。ちの上でまことめのりまをうト吉五郎ハうれしくいとうきひーて米斬ハ豆かえまハ子えまを婦ハ待うねて居るふく吉五郎墨ホるら吉「ハイ吉でどぎります只今ハ。まーとトずつと遍まハ。ち。吉「ヨ吉ゝ早うこ。あつちの首星ハどのぶろこと。吉「イヤ手ハ。あゝうきりやー上首尾くもろたりうまくゆりてまつりまーこ。モシ且那ちつうりまをハ。ちまハ。ちまハ。ちま

きんどの方まで〜こんとうちくよりてでぎります
ろ。私はいのそ驚〜を変ぬうちに久養つてでぎり申
早く変せて下きりま〜　吉「エイのそるの必何まも商業
うきまこ中ろ。お仙が親方の大和屋文藏とのの人も
そまこ〜ろ人でぎりゆ〜て。お仙このの金
金で買ろこと奉公人でいろのら。そのの呼ろら金のの
只でものひろら。まこぶ無にろる夏ごろ連て往ぶのこと
ぶ〜ことけまでぎまきろそまる物ですぎりやせんろ。

何よ〜ろ又其沢を且形ゆもたそ〜中〜て。その上での
ひ後よのこ〜中まろうとのて帰ろゆ〜こト必ぞ与まえ
も大きゆよろこび与そまこ〜ろこ何でも此件よつの
ちやア。まめく賢を折て金ろ。サア〜煩が出まこ。一ッ呑つ
せ〜ト　文藏した吉五郎をのそ〜中〜て大和屋文藏ろこと吉五郎を
ハのこぶそまこ〜ハ与まこ〜ものぶろまこぶと金ハとるまこぶ
つりにお後よそのひ。ろらば何の御時話ものまこぶ。のろ〜お仙を与まこ方へ
ぶ与ろまこぶ
きまるりんり
春雪三日月阿専巻之四終
美談

春濤樂談 三日月阿専巻之五　雅名 李朝好球傳

江戸　南仙笑楚満人稿本

第八回

去る程よ佐くめが女ケ橋なる京店大和屋文蔵ハ。與
兵衛が厚情を感ずるあまり。お仙が身の代よりとて
猶つもる丈の金子を以てお仙が身の廻りとまた其
ホウとも相談よりとくの吉日良辰を撰らみ米町へ
お仙を送りて越すに極りしかば子ども人夫婦がこゝろ

大かたころらず。出入の吉五郎を初めとして常よりうふ
ひとぐあぜいうちつど人々大勢お集ひざでんざめきたる其所へお仙を
駕籠よりお案ずして。彼の勇の源次其外両三人ばき
添ひて。手えんが店へかきすゑるとば。吉五郎ハ立いでく。
お仙を奥へとまうの源次其余の人をば次の間へ招ぐ。
いと叮嚀ふのてるすうち。お仙が奥へ通る姿を見る
よ。手えんお亀を初めとして。礼へ昔ハとまうくものまハ
敷く切店よ源さを立るお仙ゑるとば。かく雲上にも

あらぬ思ひ〜案よ相違して賤しからず。
貴人高位の姫君とおもふ。何のたづねけづ
きさるよ疑をうたを手伏るばかりお亀ハ
見るとうすおろこび。ヲヽそうそうば噂よ聞くお仙と
あらばやげる兼て重蓮や上吉五郎がたるみしふ志探の
わどハ波まるこば。るれと手えんさん波しふまきるお仙
が容貌どるるよひ所の娘ばこのこともたづうからぬ
人ぶしのや代位であるとハ思ひもうえば。こまるばば

よふの親類縁者がごぞうてもつとも。さてが娘とのことも
ちつとも外聞のよろしい事ハるの。ちくずとこのちハ
来や。そてお前年ハいくつじやエ　年ハ今年十七よ
ありまする　ヨクそふであふく不思議な縁でふ
そしこ重蔵がたるーしらさてもよ者さんもどふ
た夏ゆら他人のようハ思ハれぬそなこ聞ーよりも
きさる客伐ものどーどふであふと案じるーあとが
今さらもどりーはんらいの夏ふんとよ者さんぶふ

嬉しい夏ハどざうとまぬはうくともかるらずともよ。
さてーぶも夫婦を縁の父母とおりのて仕るのよふ。
へどもとく仲ーをんどさまとおく蔵もるる夫婦が河
おん仲ハるるもへうとぶり　年ーアく別侍るの何の日てーが
へどてをいてーまぬふ孫之昔ハ字を書くまれ。ぶ今でれ
ぶ紬ーいつとも富左の三日月おん仙そまとてアとのふふよ
苦界のつとあをひりぬ世素人よ者てんでさるとまするさん
あるよとちの娘よ者てゆふと上するのあるどーいは深

切神仏のおんめぐみとうまし〜よろこびまつりまつる
今月今宵どうぞゆくすえ長く月すてのふうんの娘と
あがめ〜。コるいるすいいくくふもお河つとうさまして可
愛がりてくださつとまをせと。嬉てまをうもうれしげな
何がさて不思議な縁で仮初ふも親とまうす子と
まうすもえんとうるるね仕生の縁。おい〜遠とを親も子
もねんごろのかうしてそうさを娘まするられおまの増
をとり祝事もまを婿うるがらかからふやさらぬ身の上源公世ま

孝行まして学とまうてふうらぬ者。ひおきうく姜の
内を見所としてかうらず何度よらず。おく庭みに
おてうまをと実ひ見る詞ようまをしく第度
たらまれまをへ〜ようお預ひゃまず。ようく何ハ
まあまをもひ見ても何ものらぬ不断着よきうくゆまを。
コレとてまを陽くまきうさうおかよくんと巴純走
をてまをコレ吉や何でもう多物を沢山料理番ま
そうのりてまらふく酒を呑でおとて巴純をへして

下せへ。そして法でとまれば。あんまりすくないぶーこのもの。
目録を渡してくぐせへト皆そもくよ仏ぶけの金子を吉五郎よりとて吉五郎よりとて
「かいく
の品モウ最前からとさんしたんだ。あつちらは法のく
来ると添次もこちらふくくらの中ごとまるらあひらき
わして仮宅とでも滑稽るつもりでこきりやす「まへ
どうでもいひ。何でも氣まりすぶいひ。仮宅へでも
いくるら又別よりおまぶぐのを去てやろう「モシ
おつりさんへアノ添次さんとのふ人これ。ちとぐ只今まで

出そおつまりこ藤の店へおつこさんのお物さんとのぶ
居をかるとて出居らるよ来て居るさろこぶ。私を可愛ぐつ
ていろく多分よう無法しておさんなすつてこちらぞのぞ
おまへきんちよとおあるきまて。あのきろをるきまて
ぐざさるとませ「ヲ、ちあう八モたの添さん毒こを嫌ぐ
おまへきんようこれをおつ寄さりませ　チヲてそのあつふコウ
吉公こちへよんでくぐつしート　添次さぐ終こびらもく
さろぐきこをさこーこのぐら
「今ちとあて業つと申こ。ことまぶあつちよ居こと時ぐん

ぼうとお世話よろうとまつこそぐさ。あり経ぐぎり
ゆとて。つゆ一つあぐ旦トさろづきをあこるおそ　源二「イヤモウ
さるやどくらあちこちで春と二人で沢山いこでなまこ。
手「イヤ〳〵こまこそでおろのが。こまこまこと拾別ごト
さろづきをさこ。コウおろの人今の物を源次ごのふ「イヤ
こまこハモシあんまるとおちるくりておかつしのが
酒のお肴よ仮宅へるどおかるきまこ。ト　今子一両紙につみ
つをつけてさこのご年バ源次ハ世のもらぎるる迷
いさみのまあす。帰つく又大和屋の親方よあるまこ系おこ
うきりの。手「イヤ〳〵金ろと腰ゆごがろんのの斗ろとごを
猥雑よあんぜるのサ。そんるそのだこのさろ〳〵やるを返つて
氣の毒。ろく〳〵おきろおさろ〳〵やいモウ夜もごのぶふけこふ
だ。店の者も酒でも呑でゆるるのし。お仙ごの着替ハ宝西
持てふきまのコレお亀ところこの不断着絣城潟をさ世ろ
がよし。手「ハイ〳〵お三やの遊くのしてゆて来やトのを
お仙ハおこさだ。手「アモシ〳〵ありきん着替も持て系

きくとおなじつくひうきまきする「ハテさてそれハ仙人の
よるとまる程のあるくをしてよるところ〳〵やる文の雨とのく志
ゐが方ようく送うとする傘も私殺ようせずに。お仙があるくよ
つくこれ〳〵後天晴い氣性不断の着まちでの仙當て感仙く
ト殺生の罰ハ重〳〵ものの引やうこうかりこうる仙殺ちりん
殺生ハ三ツうさるとよきるのまゐが。もちろん見ろうの米の山袖。やんまん
紙ど世ゐ文仙ろ拾もうるよ　おゐ「ハテ不思ぎ弐ゐ仙山袖殺も覚
あらねばお仙よりひのふまうハ
のたどろ雀。そうるこれ山袖ハりやや古着でもうふ〳〵ゐろ。又
ハ好んで拵へあるろ。どうるこ紀で持て居ゐるト。不審五

ゐがお仙もおどろき「イエく仙山袖ハ好んでもとゝらく
まあまるこ古着でも買ませぬ。とまるようのてハ深の拵子の
どぎりまちる夏。何ゐあるこゐ。そまこをおゐうきれまち
ゐ「ムそんうら何とのふその山袖ハ買もせぬが拵へもせぬ
そまこようのてハ深いようのあるまとのやまぶとりまち
ちうこ仙當のあるる夏早ふまるこ。ゆるて殺〳〵やまこのうゐ仙ハ
涙ぐみ「思ひのぎまも涙の種三年以前冬の頃まこ
まだゐて内をとてこるも生てハ居らまゐ死で呉うと

ぶびしぶと筋よ思ひつめ。所が相撲の花形川橋のうえうり
ざんぶりと飛込んぐらと其後は前後を忘れ川下へ
あぶり流まで浮つちづつ。ようちと治るを待て。
あるべの子共小藻をすあ「のりふも其時川下ろ灘
来る小船よ乗る人かくと見るとろ助けを求ひ。
うぶらも鳥羽玉の間よせんすべる見折柄「のりふ参数
尽きる市を小船のとものうえ風と浮み出ぐ下いき
かつと「つくまもあらせずその船よ乗合せる供の男。

たぶきをつんで幸ふぶて。漕ぐ船へ手のけの世一九抱
ふて扇子をきけば延母の縁よあるもあらまず内を
欠出ー捨身の望と受給ふて。義理よせまりー
不便のそなー年「ふ男もおぶれお情よ内へとそも帰ら
出ず身寄のかえ送られと夜中もいとまず撲細迫送り
ぶけー其上よたぶ落ろをあて見て。見ずあらず
ろる私へ恵みのひー仕小袖何品のおくとお病をとど。
そまぶ後日よ礼をうけて尽せー知も為の泡とお名

夫婦ハ涙ヲ別ルヽ夫婦。迷物とおもひ仕小袖貧しの中わも賣らも世ず。大変ら持てありまゝ。今のたゝるこのようの子でハ家や其時仕小袖をあさみのひ〜四夫婦ハあや。夜中このひ氣のせくまゝ。お顔もろくく骨ゝ紙ど。どふやら お近付のようのでもあり子「いろゝも其時とをとろる女房お亀めろとも花を挿水よ顔ろく娘を助け。必招ゝて摸縄ゝ連ゝていんで小袖をゝ名をも呼ゝ名のらのでゝ夫婦ハするゝ私ハ

「そんゝら其男お投ゝ娘ゝこのハ「あのゝり私でどぎりゝ子「ゝこのゝとゝ。ゝこのゝら子今変で子「ゝのゝ子親ゝこのゝ「ゝ子ゝとゝびゝくゝ「前ゝゝこのゝら結あゝこる縁ゝ縁約束夏で三人「有ゝゝこのゝ一緒ゝ合て泡然ゝり子ゝ人ハ再びお仙ゝ。その時ゝ母ハゝく。会ゝの母ハ紙母ゝ。ゝ実の母ハ元ゝ。又生ゝ別ゝの離別ゝ。斯ゝゝゝ人色ゝ。父ゝの本名何ゝ。明ゝゝゝ。ゝ「ゝれゝお仙ハ二

人に向ひ「何ぞ」と「度ならず二度まで」私が
難儀を救ひのハる恩深切今ハ何ぞ白み生せ。元
來私ハ武藏倉扇ヶ谷うる求度要と荒春風さゑと
いふ人の落亂母ハ幼より山国うる町人の娘とあら縁で
とてもあまと求廣の館へ姫奉公ふとしと立さゑより殿さゑよ
思ふれ。恐まえい夏うぐら。お藤間の伽ふ只うるれ身と
うるとしより奥さゑの祝ふみよ盛ふ恩家中うる。何某
さゑのお情ふ。ずいくうるとうる産ふとし。その祝ふあるく

お暇をとり宿へ下ッて其後で。ふとしハ恩別家ぶ
さゑへ養子の身の上養ひ親の恥さゑの恥ふ居れ
ゆも居まぶこと内をぬけのでで花ふ搗く身を流ぬんと
ちうる折柄ふすけのるハうしハ恩夫婦さゑうるの恥より深
の恩恵不思義ふ恩縁でぐり生チト嘆て再び驚く
女房暫し物をものうぐりしが。漸ふて涙ふ濡ふ向ひ
「今さらヤむぐるも。おのてぶ世の夏うぐら。のうれを
ひとぐ恨深いさんげだうの一ト通り嘆て下さうまを

今のたゝしのようすでは。こまうるお仙とは。私の実の
娘でござります。子一く何とこのふそんるらはあお仙がそうこと
の実の娘ゝろ。シテ其訳はどうでや。何とも恥ずかしの真ハるの。
譬へどのようなる真が有ふとも。おまぶ方へうこづるの前のす
るうやゝ。おまぶ何とも分まふ真ハるの。伯夷叔斉ハ旧悪と
らぬめずとやらん。おまぶ所へ縁付て来てうらとのりてハ。
ちつとかども不埒のるいたるうこさどふのの子細でやたゝふ
たるゝと咲うゝやまこサトよ子きくがさぞけこ言よ。あるゆハ
ひとぶ顔赤らめ　あるようなおまえが粋ものの下
さりまするかどどのもやふふんふんどざりまするが何を隠ー
ませふ。暗とのふてハ則ちまこ十五の年ゝら扇ヶ谷
の未廣のおやこへこ。のとと奉公。ある時奥さるのお役よ。
お表へまのりゝところ。殿さるふーぎさるを見をひらんるさ
まこと。ひ家中のめんくへお物がりさゝでがまゝ。
うぶら私ぶ岩ふ子細をやと上てぶひ縁のたゝ風と殿さる
の目ようまるゝ美さりまるへとのさるうら私をこ

との有つ難いに意奥さまも独の外の賢女ゆえ。
せるの為さまを近くあらしるきまで。委細の訳を
物ごとうきまで。お表へ引てくまいとのお伺有
がてはどぎりまきまで。ちさまはは夏だりはと辞退
やせと吹れに氣質はん呼うく糸りに日うす私
ぐ男おくるにつけく。奥さま日頃よりれねさみ
のう。蜜ようぐるのあるまの。いさまの須ふて家
中へ下ちうみ落しるくまうるお仙その娘首尾く

にはとり病へ下つく居るうちよ縁でそもまを前
呼へ嫁入して来て年月。深ふてはまは夏は余ふと
面ぶせうるまの。ゆや何の仲うりまも。ひとふは夏まさ
うら。あのちがつきうあるうとやうると思ひすごして
今日ぐ日までロへは出きれど雨ふり風間ようその娘を
見るまつけ。どこよどふて居るまの夏と業ぐぬ日とまは
うるのことはいのふ親子は一世と吹くのものを。ゆやあまを
ぎうと遇まれうとかるしふ思うこと永のう年月今ぐあ長

親ぞとも又子とさくも者〳〵程ども一度うゝ子二度迄
も。ゝとてゝすゝめてもうゝこの難儀を。すくかてゆうこも今
とうゝくハぞふ無らぬ〳〵面目うゝ。さハきうゝとうゝぐら武素
性平の種であうゝとうゝぐらのうゝひ苦労をあゝ月ゝこのゝ。
かゝこの者やトだうゝうゝもて体うゝくぞうゝげきゝる。子ゝ
も漫ゝ涙ぐみ「何のゝそまゝぐ面目うゝ夏ゝ。ゝこの馬
の脊ゝあらねものできゝ。ゝゝゝゝ中の娘を浮川仔の
いやゝの勤をさせておゝゝ不便きいとゝさゝ月ゝあらゝ

の者へ金をやゝて受ゝ生ゝて。子ゝ子ゝ者ゝ程ゝ者ゝ
ゝ志ゝゝて四種ハ雖ゝ。今鎌倉ゝゝゝゝゝ
ゝ屋ゝゝの落〳〵種とのひ復とかゝゝゝハ現在女房
ゝゝゝ。ゝゝ子ゝ同前。ゝゝゝゝゝゝゝゝ子ゝ
ゝゝゝ重ゝ嫁。何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ実のゝゝゝと思ゝ其代ゝゝゝゝゝゝ
尽ゝてゝゝゝ。波をあゝゝゝ。ゝゝゝ亀ゝ妻堵
の思ひをゝ。姥ゝ夏でかぎゝゝ。傍ゝ居ゝ勇の

源次は物ごとうよ横手をうち　源　さてハお仙さまをとく
ハ志度さまのお駕さまでござりまして道理こそ雲
上人といふとも。たづねからるゝ。只人でハある
まいと。思ふまゝ。今のおもてに。何を隠しませよ
ちつとハ本名もあるもの。最早今日のお目出度つのぐ。
侍女の弘中をぬぎませう。元杉が娘ハ志度殿
亮さまの。家老清風夏進さまとの。お方の乳
母奉公お暇を下さまして。後も折くはきびしうゝぶよ
おづつと呼さまの頃。且那夏進さまの妻に迎くれ
ませ作ばらまして。殿要さまの亮さまの。ものやゝ五十
をとこさせのよ。只一人の若とのさまのみうまゝ。
細くおまして。ますふつけ。先年姫あけぶの疱よ生
せしまして。女子。その折病ハ奥ぶ移さみ。別家へ
養女よつゝ。せしぶ。その後ものうふ。雲ば。是よ。おのく
病死せしまして。まゝハ。姫母のさぶしらまゝ有ます

ましが家出せしより風の便りに聞くと喜ぶ。
世に存生あるならば一旦民間に落ち着き者表
だちに娘とは言はざけれど内くに何卒對面已
老後の楽しみにも成るべのなり汝うまづ行衾を
さぐりとようと。余義ある君のもくさんなり
うぶら雲と間うるべのもの。何所をあてどなさぐ
さんにもるまじの家の補佐する身ども。漫歩行も
たづかるの関の戸にて遠近と尋ねん夏なりぐる

ましば頼むとのふは妾の夏なの方は男子も多く有とる
関けば。何ぞ姫上の行衾をなる喜ぶ莫大の大
功なると大悲うけ進きなのお洞かとまり
まして蛇の道はへびとやら子どもホゲ方く世間を廣ク
交會てある死まするもなつけの幸ひ早速お姫さなの
お行衾をさぐ出。吉左右をあらせうませうと冊
なつ受合てかへりまして私をしびまりてこのふ
且那さなのお頼み。常ハ甚と世話をなする代りぐも

そのお姫さまのお行衛をさがして。旦那夏さま進さまの
不幸を思ひあらゝ子がせめてのもの慰めぐゝ源次こゝろを
お袋が涙をこぼして一言ぞえんがとんごんをの私でも
現在の兄弟がよくくの夏うまいことそ子へるまと下く
乳母こゝ冥加がおそろしゝと存じまして堅ず
お茶ゝ常平生ら明友づきあいが好で先ら
先へ呑てとまりあるきごとらごとまでおゝれ者も
後へ源次。珠さら女のことうら大磯小磯化粧坂阿部
川の二丁まち佐く女橋長谷の観音堂前の切店よ
いるとゝ。おられく夏も行くおゝ。ことるどのゝ女が
有て。判人ハごまで声を持うる年季あまりとゝ夏と
おろしく知つとのてあるおゝ夏ハ女をさがすゝ宅
きうゝ今の男の上唐高麗くいろとらおろまゝ。
鎌倉辺辺ときくあるるゝらバ。恐らく変ゝとゝ。
夏ハあるゝくら必ずあんがるさるゝ今のけ出
おて。まを引て連て来ると日本程よ待くゝ出るきり

まゝとゝかゝら出まゝ迄よゝろこゝのゝどゝゝて私ゝゝや
迎ごゝとゝあてゝごゝよゝさゝゝとゝゝいどゝりませねど先
頃ゝゝこゝ迄ゝゝゝ女子のゝゝの夏ゝゝゝ傾城ゝゝ安で
ゝくゝゝゝ芸者ゝ茶屋女ゝゝゝ迄ゝゝゝゝ付ゝくゝゝ子肉
私ゝゝゝゝゝゝゝある女ゝゝゝゝゝゝゝゝ佐ゝゝ女ゝ橋ゝゝゝ店へ
だゝゝゝゝゝゝゝゝ

きこゆるかど高いもひくいも男愛の互ひに切なるものハ
あるまい一国一城のあるじとも成るとも子ゆ
まさるハ親なお仙も亀もかならず殿さまの四男を
伝ま出るとぬがよひ。源二どのこそもよくこの信節よ
ゝ母の詞を受けて。お仙をいやゝ其人ゝと思ふ心を付
てくるとて。不思議な縁。併まづく此度ハお屋敷の
外出ゆもかなる夜拵内くまして。ありまうお仙ハ
どこまでも。なまぢ子のぶんゆゑ折を見合殿さま

へもお達世ヤチがよるの。まぢそまでハ内外の者へも
沙汰ゝよ粋なる子ゆへ公のうち。お亀お仙源次
まで感じ入るかろ〳〵かそれ其ゆ源次ハさるがたゝへ
のものがりけまぢ。文殿もまたゞめてお仙が
お方殿ごみとまたらぢがよりやたゞみをけりさ
ぢまとゝそさまのひゝハそらあてろ〳〵。
よ源次ハ川ハまをるゞあろ〳〵かりて左殿の夜ゆあらず。
きぢんのあんまをかんぢ。後日ゆ礼ゆもまのらぐきゆうゆいひゆへり。
よふろう夜をあんぢのふゞのひろぐきゆ。あろゆろとも左の倚偶を
かんぢけるかこのち源二ハ殿ゆるものへのさのの足物がりけまぢ
大きゆよろとびとるものもろとあまぢ。夏ゆ進が友へのとり。右のゆまろ
をつぐきよかゝりけるかどゆ。夏ゆ進ハこの夜ゆ上。ひとろふ
夏ゆ進がゆきゝお仙をよびよりて。殿へ出まゆ上けれバ。まぢ足

林の外皮けづきよろしく久ぐ手て父子の對面あるべし。子を婦人婦へハ
あまたこの金子をめぐみうすからぬこゝろざしのわどをかんるーのし
程文の源次ホへもて出ーくよろづけのめをめくるとけるバ。
よろこぶよ大ゝ云ゝらず。たのたのまをかんじける。

春霄美談三日月阿専巻之五終

春霄美談三日月阿専巻之六　雅名　李朝好逑傳

江戸　南蹠笑楚満人稿本

第拾回

夫芝蘭の室に入るものハ。その芳を覚へず。鮑魚の肆に入る時ハ臭を忘る。さるとぶ危邦に入らず乱邦
に居らぬこそ。聖者ののまーめるうちとのくども。お仙ハ
乱離の内に有て。松の操の色をうしなふ。泥中の蓮砂
の黄金なるものゝうら。終に道真屋子を湯ゞ爲に

よ紀寿の上ともうしても。まことに積善の余慶うるべし。
かうとしてかどよ。お仙ハその素性さへ有て。あて人の
種ゝうまれのくどもすとしもかとるけ〜きうく。年廿歳
を実の父のごく敬ひかしづく夏大方うるらぜ。子三人或
時妻おろめよりひ「何とお仙も最早年頃貴
きも賤しきも女ハ夫を持ねばうるらぬものうた賤へ
ハ〜ハこもあと今ハ町人道具屋子三人が娘とうるべ。
商賣のうちよかりとき婿をもらひ代をあられば

ろうらぬ夏うり。そまとおつきの者ぬめを婿よ者ん
より。お仙が夏をまえ人とのくた重兵が娘〜たる
夏ゝうして。かうるあきおもおうんぐ夏ゝ一方うるら
ぬ縁でもあるかどよ。何と物ハ相殺じぐ重兵とお
仙と夫婦よして公儀式をあづり。こうてとあるハ隠
居して好る本でもあて。世を安らかに渡るかう思へ
ば。そうてこのひとどふどや。トのうまてお亀も「何が
偖公ゝどうあうこのひ深切有がこのとも嬉しい

ともやうふもござりませねば。何をコさてがゆるをヤ
ませよ。孫よ。ゼ年頃実体なる重蔵が夏商賣の反ホ
油引ハるゝ。あのやうな人を婿よとらば行末は。貞
屋の内ハ万々歳。ホ。ゼ。ウ。ウ。夏ハ何ぞう私どもが何
と思ふてまぶとて當人同士が不兼知でハ破談のもと。
よふ當人同士よ得心さ申てくらよ。このよふよ計ろふく
下さりませト。ホ。ホ。ウ。ウ。さうもくまぶ仙よこの
ゝを言きてする。ゼ。ゼ。ウ。ウ。かくさんの作せ何のゆゑを
もゝ申うと親あらわてこゝあるふぶ。まゞこまも一ケハうをふ
又ハ重蔵を入るゝ。ゼ。ゼ。ウ。ウ。ホ。ホ。ウ。ウ。ヤ

時よ重蔵や。こふ改めて呼んゞ子細とのハ別の夏
でも祝へぶ。アヽお仙ゞ夏ハいろくこのことゞ不図ゝこと
からあまゞ貞実なる心のきこを見ぶしておのら達夫婦
へ物ゞこゝろよりして縁おとりとお亀もやひゞ娘を
一人拾つゝとのふもの。そまよ付くハ未廣の殿さゝの
思ひもとふつゝく何もそまを當よするよふゝ身上で
もるけまゞども。莫大の金子をゝゝハゝ。殊更お屋敷の
用を達すよふもるゝこゝ元ハとのゝゞみんゝまゞ其

方ぐ影のようなめ。髪よ一ッの頼みとの穴。何卒お仙を
まへぐ女房よりて否であるとも道具屋与兵衛ぐ孫
式に相續してくれるのうと。夫婦ぐ余義なる死絢よ
重蔵「こまこハく且那さゑの心絢とも思ひませぬ。あり
難い事ハありがてふぐ。まずまづお仙さゑハ未廣様
の心種。こまこどふのこしまて。私ふぜいの賤しいものぐ女
房ぐどくハ出あくい夏ぐふぐ仕るのだろうハ心免うされて
下さらとまず世。悲よお仙さゑのの特

三日月お仙といふハどのようなる女ぐろこ酒のまぐれ。ちろと
上つまハあぐりまくこまこど。心存のとおり実義なお新よ
涙を流し徒どころ我身で我身がたぐうのと。後悔
あておりまくこうち。喧嘩のさきぐどころぐふ仕返り
まくこと夏ぐまぐ。みぢんも乱ぐ心の夏ちのこまこませれ
ど。お仙さゑと夫婦よるりまつてハ彩やたどのうら沢でも
心ぐ生まつまくて。ろうる仕義よおとびまくこよふよ。後日よ
殿さゑのおぐくめくも。たのうふぐぐりまくまぐ。幾重

ゆきかとまりゆきすすみて夫婦は「うるわど旧
頃くら堅くろしのその方ぐ分でぱ。うろくそふ思ふもたうぐ
ら。種ばとまりくも一旦子を入ぐ娘よしこを仙貴人高位の
落胤でも男の子とのくでばるる。町人のそうそうぐ女房よ
持ちまぐばとて。何の遠慮する事ばうのどのぐ一刻もまやく
其方達へ身上をとりてて隠居して月花雪をうるを歩
行ぐおまぐ頼ひ爰の所をゆとけてトさるく引寄を解て
すむぐとのくども義理のうこと重蔵のうるる差引せぐり

けまぐ一トまぐ其後ゆて居るぎけるかくてきまも移
暮うえとすう頃重蔵ぐ父武蔵の国芝浦村より遠くの
主人夫婦へ家暮の礼公むうりのうまばきこと人うきくよ
徳へども貧乏人のかるしきばどまのまぐーうこ田作ば
ある呑百姓相変の贈つとのとば知らまけり重蔵ぐ父徳作ば
ぐ徳作「ハイくおくーうばくーうば不沙汰をいこーくこ重蔵ぐ
親父でどぎうこまトトぐ下女の参三「ヨやく重蔵さんの
おとうさん。先おぐうまれまーくこ徳「ハイ重蔵ぐばくとり

まつす夏ハごぞりませぬゥ　おさん「アイく童衆どもも隨分
まめで勤めてゞどぞり　まつす　德「そして旦那さゑ内義
さゑも。お達者でゞざりまつすゥ　おさん「イエモウ　旦那さゑもお
内義さゑも。おつとりもゞぞりませぬ。そして仕間ハとんざ
おめでたい夏ゞらけでお内ハ大どりこみで。今日も奥も
お屋敷のお客さゑが大勢お出ゆうまして。藝者衆が来れ
ゆら何やうや大とんざつ。マアく爰へあがりてあつくりと
煙草ゥうまと呑でおのでうまりませ　德「そまいく何久

あつとませねど。目出たい夏でとりこみとハ。まづゆつて基ゥ。
そちゃアアどのようゑる夏でゞざりますト。ゆまてきざゥゑ
下女のおさん「イヤのそまハ嘸のようゑる夏ゆくらの
佐く女が搗とゆらの切店よ。三日月お仙といゑ美い女中が
でゆて。大評判の所。おまへの息子さんの童衆どのが其所へ
行て素性とゆうを聞ゆゝこと。ゆがよい所の娘のゥ。かくら
まて旦那さゑやお内義さゑへ妻にしたゥ。常ぐうら
お情ぶつい旦那さゑ。てくるのそうゑる夏どゞそのの勤めを

引ッこしてゆくこと。大ぶんの
金を知って。受出して遣ス
うきまとて 徳ハテ そまハ
心氣ごくうの夏ろうかど
平性ゝら思ひやりの深い
子をさの夏そのて
ごぎりもきあう ちまて
おぼうの内へまて 居くよう手を

嘆こぶ子トけこ小 そのお仙さんと
いのハ内のおうこさの元去ろ
ごくん 心夫男へ勤めてお知るきろこ時。
殿きの心ますが付て知まこ
実のお子ごとも。そま西家
お仙さんをバ娘ようきろく。
其ハ披露ゆら又ごのいへ沢ろ
末廣さのとのふお屋敷の急ぎる用を作分らをて

ゴ扶持が来るからそのゴ褒ひ。何やらやとうとまぜて。毎日お客でゐれる仕間ハいつでもハッうり早く寝こと夏ハごぎりませぬ。その代つと毎日く料理茶屋からの仕出しやとく魚肴材ごの類ハ庚菴ごのと。ちく美味めく喰ひあきをあて。おりろの夏の吹あきを変色ごの落蝕ごのとうるさの程代ハちつと佳肴も鼻よつのとうふで薩ア芋おひこーぶこぐころりまこと。問こ手ごりにちや屋つけるる徳作吹ておろこび　徳「こと八ぱくく前方も

ゴ苦労ゴ最ゴの中且ゴさるやお内美さるよお目よかるもかつてゴ面倒でゐふ又春永よあるりと来つておろこびをやまーやうのそがくくとも重箱をすとよんで下さりませ折角来こ喜ぶ。逢ってまのりとごぎります「ア今重箱どのく恐ろ奥のお客のお取持よそごぎりまーこ。お前のお出るきれこと子を蝕て美へ呼んであげまあるふやしのそがやトつぶかたつ。お三ハ奥へ入よんつとかくと愛ようまに代重箱ひろけとりのちよ車「すくこいるしが父よ逢んとおくるのご

こまかく親父さまよりこそあるまされまゝ。今年ハ
月よりの寒ゝも強ふござりますゆゑ。お老年のおやや
寒さまでも當つたハるさまぬうと。大体やたうあんど
まゝこと夏でハござりませぬよ。あすとかゝるお顔を見まし
てひとゝふる姥ゝの夏ハござりませぬ。シテ乃近所のお
方よ何もお変つたハござりませぬゝ。別して私が初めの
時ゝらお世話よりまゝ寺やのお所迄さる乃更嫁
ハお達者ゝト咬深切よ実ある志とそあらまほしけれ。

徳作ハ少ゝお点孤徳一何もあれる夏ハるの。伝親父ハ
月もうれる夏もゝく。麦飯を三度くよ五六ぢのづゝ酒
も随分りのとゝり。歯も達者目もあきらゝ足も丈夫
一日よ十四五里位ハ茶の子位でハ五六十年ハ更合
かるらずあんじ申るゝく。そまハそふと内方ハ何やらん
お目出度この夏ぶかさる通て毎日お客がつゝくげる今まで
どのぶたるゝで変ゝう咬ます〻ゝこぶお仙さまとのふ嬢
をお貰ひるさまとこゝう人の運とのふものハ志ぬもの。

人ハ氏ゝ　そぐもちとから、そるさるどもまんぞら百姓の
種でもうけまども運ぶ　るけるや　多代奉公さとをを
みん支配　こんで居る仙の内を考へるとあるや涙が
こぼまるこのかの。老の繰言重ねハ波ゝりいとぐ不審
たまず　重親父さま　コリや異る夏とあつゝやうとます。現
在あるこの子をさして。まんぞら土民の子でうの。多代奉
公するとこんど出世の仙でいるうとのお海こハ私こハ
たり解せませぬ。の頼つゝぐみるぐわ　徳「ゝるゝぐこと
おるりのあるこふ合点が行まの。今まぐふ言波ず折もるし。
まりや仕るを白地よりゝくく波世ゝきらへぐそるぐ出ゆう
ゝとのゝまぐよおのゝぐゝもちぐ素性一トとより言て波ゝそよ。
実ともちハゝーぐ実の悴でハぐふるのトゝ　重「エ左ゆう
るゝらバ私ハあるゝこの実の子でハぐぎりませぬゝそよとハ
知られぐどゝまでの四養育産の親すおそぐぬ四ぐ。
シテ私ハ何者の種でぐふのの沢で。あるゝさるの子ゝ
ゝるゝまゝこのでぐぐりまする　徳「サアとまこのハ深のよ

よふまの有事思ひいだせバ二タ昔
死んだ老婆ありしもとの鎌倉
長谷の観音さまへ。御通夜をして
のかへりがけ。松の木のもとで赤
子の泣声。ハテ心得ぬ赤夜も明け
ぬに赤子の泣声なりや狐狸の
我をたぶらかさんとの所為
あらざるかといふうちうぶごゑ

寄つて見れバ玉のごとき男の子
鞘龍膽の御紋の牡丹から草
のしめよくろみ漆にてあつらへし守
刀無銘なれども業物と見ゆる
鉄色繻子へ八まくり縫紋どう
の高蒔絵。何さま由緒ある御方の
かくし子と。いよいよ直ぐさまらしと。
いとゞ不便もいやまさり。ひろひ

あげて連れ立つ人々とも。まづ其頃ハ今のよふな
貧窮ふもうけ是ぶ。乳母とおのくそぞろあげ。そなたね
ぎうのめもきをておいぶ。十三年あとの津浪で田畑ハ
いふもさらなり。家も何もぶいうしようり。せふ妻ようよ
そちもぶ縁ととそちなたに蔵へ丁雑奉公ぶんくと下り
坂ようくあぶ不仕合。婆ぶ死あやうゆら引つぶいく
ようぶ永煩ひ。喰ふやうにもぶにうりたてくも。此ふまりハ
そちぶ実父とも知るよふぶ。ふと賣ぶ。肌ぶ放さず

持く居こに組力。こなたて疑ひ晴らしてくれト。
ちのごとくに和の勢力。ふそよけ。重蔵こなたてくれ
今さら何と河さへうくもうこなたに場のたよ。さてハさ
ぶ。おりからあいの風。奥とあけ。えるる一人の清けやも
こなたるちえぶ。居合せるハ駕ハる清九家の家来ちく
拐原三保ぶ武さのぜんくうこの一下間ハ二人ぶ三保ぶ最
らくこうぶ。ふとて徳作よ義ふ。ふ
前ふ其方達親子ぶ物治ハ
ちく吹くこと。何ハこもあなたそ
ハ。注方ふくもうの合口と三保ぶ
きなたぶ。ふこうあげてくこ
ぶ。ふこうあげてくこ
ぶ。ふこうあげてくこ

きよ爲き三條「この短刀ハ仕方ふも覚へある品たり。
今物がたり〜短刀よりてて捨てる一子とのふハ。こまてる
手代重藤とやらんよ。相達うたやト根を押よ徳一何が
さて偽つをゆきせう長谷寺ハ観音さまのお授け
うきまてこ子と貧乏人ハ相應よ育しあげ荘の図も
あてうんご物うまてど。只今もかまくことふりいろくと
不仕合がおつぐきせふてのうよ一人づくもロをへらチが
肝要とこまの内へ奉公よあげこ重藤実の子でハ

もたどりません。シテあうこきるハ何ものとの短
刀を見覚へてどりチやト詰う向ふこ保こ次
再のあう三條「我こ君清見の判官義景ハ公のまぐ
へ部屋住ゆて今年頃大後うる舞子何がうる者
よ寵こ知らうとこと。ハたとあうと一子當主うりけを。
世間の女へをたぐかり。金子うの頼ゆ公こりのうこうる。
紋付の小時振袖よ小家の重法こる短刀をきへて
親里へうこ〜のひ〜を。その舞子が父うる者の邪

見ゆ。かゝる活業をする者のこゝろのありてふ非ナこと。終に何所へか捨てるこゝろ。既にて波に浮海猫をかめどす。詮方なく抽者屋よりうりうり渡く方へと。うつくしてせんさくせよ。

武蔵のそうる其方が
ゆうひそぐて入とれうる
国もとうまる相撲うる

町家へ奉公するぞと。
神ならぬ身のさらぬ
たゞ今ゆてふ君ぞ。
男子二人まうでゝ
夏をかくしゆらぎ。
さすがの君捨ぐこゝろや
ふつゝ言ひのひて。何所へまどゝて居るこゝろ
ひ世よる人の数や入ること。あそび狂ひの報ひ

高きものやうなるものからぬうらひ小子と呼ぶことを知る
ものなりよりくれ在家をこがーまのらせし此年月
豊ふらんや此家の子代重務とて我を君の公達よ
てまつりきて只同座のこすも恥まあつと遥ふ
さがつく重務を拝もそるあつさる。二人ハ何と洞を
うく。黙然として居こりける。あつがこすハ最前
より三保の子供が来ると居らねバいとのがーこ我家の
内尋ねまりて為陰らゆて。安うすゆ鳴りあがる五の三保

の子供来ると呼よ手むりひ「惣ってがし三保の子供来るへや上手子。私
方ゆて先達て子細有て養女よいこ世ー。お仙とやハ拙
者が妻我方へかさづるぎる以前恐れ多くも未廣ハ要之鬼
さるへ四奉公四国房のおお伽をつとめー折柄ものあけこる
女子則ち下借腰とハ十ろがら正ーく亂ハ未廣家のに
姫ぎみ。先達て重務と女合ーて家をあがら真を
すくーかど。従来義を守る真金鉄のど死重務を
のやーなをたがらひて。貴位の亂るお仙を妻よせん

と夏恋まあることとてだくさいの河岸。理よとものはまれた。
その侍ふしてあるこが今の出掛沿よて初めて右まさる
重勝が素性も正しきさる侍のれ桂お仙とゆひ重勝とゆひ。
かくまで氏も系図もうあるる方の姫君八公達町人ふぜいの
私が娘とうり手代とうりのふのも。宿世あやしき縁し
ろうしん。迎も重勝夏も一こびかろる市人よ成ろうい。
武士のまぐらひもうりぐさからしう。何卒代まくよ代子を
が將よくぐーのはらば。代勇の幸ひ代うるし。早速我ホが

預ひの通りお仙と夫婦よるしろる上代式をあげる
た。我ホ夏も今とそろく町人ろるこども。先祖ハ故ある
武士ゆて八幡太郎義家公が家臣ふして。何ぐとよろる
武功の家うろう。こは覚じて疑念をたらし下さる
べーこ家の仮沙ようみし一巻をとろといぐし。三保谷が
まにとこ世べ。明き見ろう大きよおどろき　一ゆふも代
系図のようゆて八八幡太郎義家公の四内大江平太夫
国妙ごのく未詳のう。まぐうからぬ同じ源家の右馬

ゐるべき。雲へ今市人よりゐる居るものとも。すこしも人の上を
ねる重義公も初めより農家より生ず商家より仕へ来たれば。
義盛とうく利を争ふ業はかりとらんがためなりる
がら手物とりて。武道のことハあるべからず。さるにハ
身をもて表ゐて判官の公達とのひがごとに幸ひゐるる
内縁もある。未廣家の落胤とある。お仙どのとやらん丈婦
ふして。公家の跡をつぎ世ぐさらん夏小子よりおのそも望所
判官殿日よりきこゝ多すこもすくからず。とく

重義ぎこもその上昔ひとぐけ有て一刺もすくお
仙どのとやらんと丈婦よりゐる養親とる徳作どのゐ
子ゐどの丈婦の父を保はるが忠義お全の手ゐと
理非明白ゐる三保が。祠より一同感ずゐ。よろこび
あふぐかざりゐ。かゐる折しも女房お亀ハお仙を
ともゐ愛ゐ来り皆ゐ手おはるる「三保ゐ林
が寛仁の心たゐらひとゐひ。徳作どのもとゐとらハ
相ゆ同士重義どのもずのぶんとお仙を可愛ゐりて

仲むつまじく。そひとげく下さるべし。まさお仙も重
藤どのとハ。同じようなる高位のおされ。まさらずおと
らぬ氏夫婦。必ともよ勇を。さろぶらず。女ハ夫よ順よ
ぐ道未永ハ友白髮よろまでそなて。貞節を尽す
べし。如戈内義のとりさ犯龙のあさまる氏場の宜
義三保ハ女も満面よ笑をふくみ。今日ハ幸ひ黄屋吉
日ろるとバ善ハのとげの壁へのごく氏三保を助婚姻のさ
さえよ。お仙へ重藤を妻合しも志るべしとのよよ。

えへハまずく嬉び一ニ三ハ
ふく須よてもるの有ぐこの
祠才義ハ慰のこのうちよ。ッしお亀料理番よ言付て
祝言の用意親類中へ人をかゝ。ちやく氏上音をあらす
べし。まづく三保を助さるよハそ是までハ孝義を久
てもり一献。やレ目出たのく。このようなめでたの夏く
ろのこらく亀徳作ハけハくらく大夏の男どの
奥へさもるの門ちそうをト。勇みそろあるぐが祠
お主一ッ吸べてや芸者ども皆口くよ「モシ且那ろる

お目出たこの夏ハごぞりませぬ。あるいは目出こうのでよさうなきまるやうト弾やらうくよみら上を考こへの大きうなきよ。家内うちうり大笑ひ。笑ふハ福来る。斷へよのまれ道具屋がさろく栄る物語目出度数よふことをおさまれ。

三日月お仙の物がたりハ薩の祈ろ〳〵言を接とあてつくことのふけ〳〵ど。謡曲滝本の脚色をからず。貞婦義男の始末を説。うるゞ面白よ

是ゝ明の小説好逑傳ゝ比して一名を李朝好逑傳とゝるゝとゝ。あくゝかの書を翻案せゝるゝもあらず。作者ゞ意匠ゝ成るからゝ。その趣の異なるをとゞむる夏ゝ。

春霄奚談 三日月阿専巻六 大尾

江戸　南仙笑楚満人編述
仝　柳湧陳人驛亭執筆
仝　一筆菴英泉画

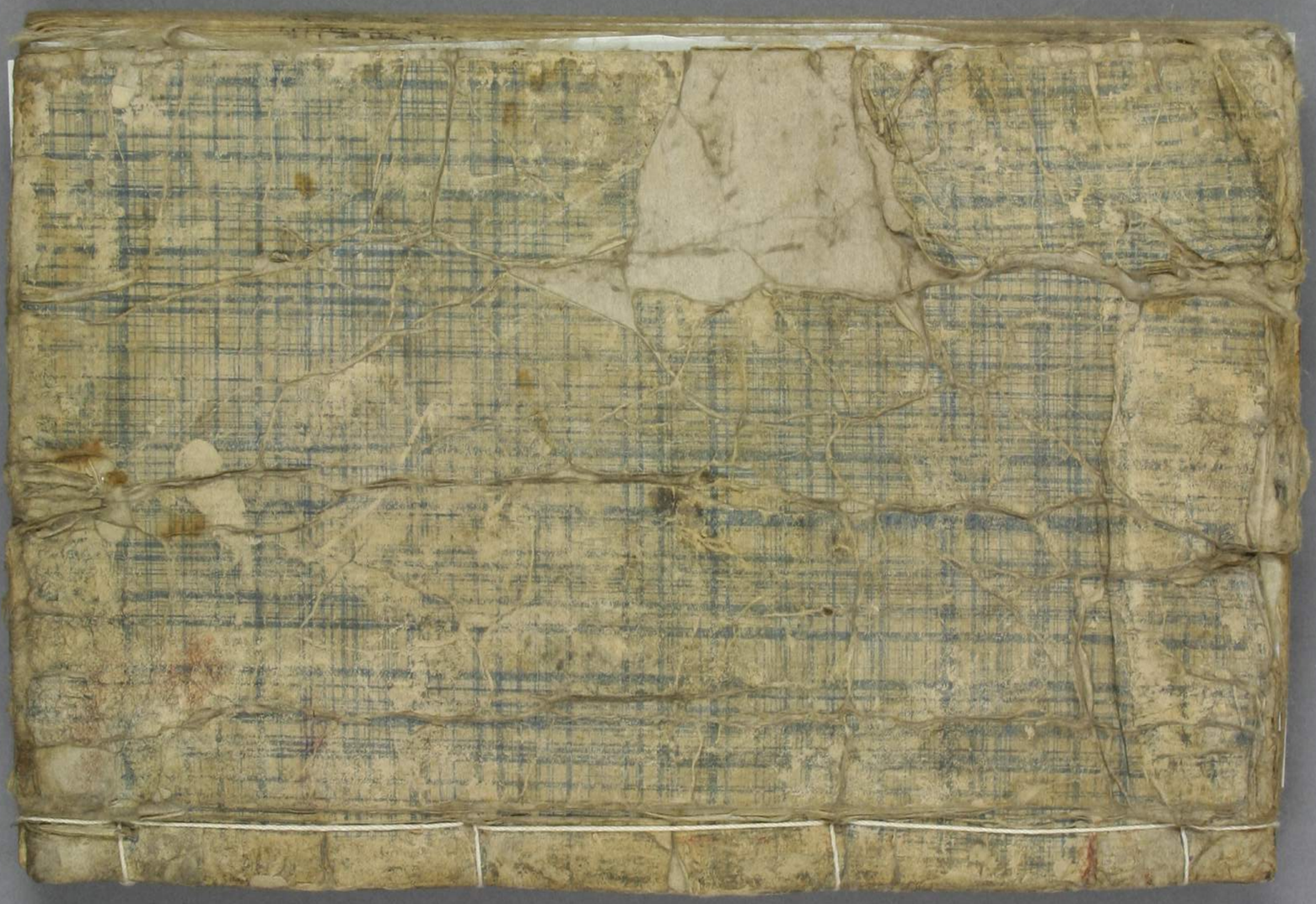
浄書　音成

恋情　夜半乃雪　全部六冊　南仙笑楚満人校閲
近日うるさい出ーヤ　溪齋英泉画圖

作者　南仙笑楚満人
画工　溪齋英泉
校正　驛亭駒人
千葉系譜　星月録　楚満人作　英泉画　十冊
戦国名勇　十杉傳　同作　同画　十五冊

文政九稔
戊ノ初春

江戸馬喰町二丁目角
永壽堂　西村屋與八

同　麹町平川二丁目
平川舘　伊勢屋忠右衛門
発行

茂